

早期発病側弯症の治療

座長：鈴木 信正・瀬本 喜啓

このパネルディスカッションでは、側弯症治療の中でも治療に難渋することの多い早期に発病した側弯症の治療について、様々な面からの発表の後、活発なディスカッションが行われた。

名城病院の川上らは、67 例の先天性側弯症の奇形椎に対する骨切り矯正固定術について発表した。彎曲は術前 51° が術後 20.6° となり、矯正率は 65.9% であった。手術合併症として神経症状が 7 例あり、より安全な骨切り手術を行うには三次元的評価に基づいて手術方法を決定しなければならないと報告した。

神戸医療センターの宇野らは、神経筋性側弯症の手術について報告した。神経筋性側弯は、装具などの保存治療は効果がなく重度の彎曲になるまで放置されることが多く、全身状態が不良、意思疎通が困難、手術適応や時期決定の難しさ、周囲の反対や無理解など様々な問題を抱えている。また彎曲は硬く、骨盤傾斜も伴い、その手術には脊椎外科のあらゆるテクニックを駆使しなければならない。側弯専門医といえども今なおチャレンジングな領域であると述べ、40 例の手術結果を報告した。

大野記念病院の瀬本らは、乳幼児期側弯症の保存的治療について発表した。乳幼児期の側弯症は成長期間を多く残しているために増悪する可能性が高く、治療は長期を要する。また、必ずしも原因が確定できないにしても joint laxity や hypotony を伴う場合が多いなどの特徴があり、その治療も思春期例と同様には行えないことが多い。8 歳以下の特発性側弯症 33 例につき、発症年齢、性別、彎曲度、カーブパターンと進行度との関連について検討した。その結果、男子では 50% が増悪し、初診時 40° を超すものも症例も進行例が多かったと報告した。

青森県立はまなす医療療育センターの盛島らは、3 歳以下の幼児期側弯症 22 例の保存的療法について発表した。このうち手術対象となったのは 4 例で、Cobb 角 40° を超えても装具療法で改善する例や 10 歳以降まで手術を待機することができた症例もあったと報告した。

済生会神奈川県病院の河野らは、early onset scoliosis に対する Growing Rod 法を行った 50 例について発表した。術前平均彎曲度 58.8° が術後 25.8° に改善し(矯正率 57%)、VC、% VC は術前に比し有意に増加した。最終固定を行った 15 症例に crankshaft 現象は生じていないが、感染を 3 例認めた。手術時期を見定めることで、同法が彎曲の矯正と呼吸機能を維持しつつ成長を得る有効な方法であると報告した。

名城病院の辻らは、VEPTR を用いた expansion thoracoplasty の 8 例の治療成績について発表した。初診時年齢は 4.3 歳、VEPTR 手術は平均 6.2 歳で行った。基礎疾患は spondylocostal dysostosis およびその疑いが 6 例で先天性側弯症に肋骨癒合に伴うものが 2 例であった。VEPTR 手術により術前 Cobb 角は平均 81.9° が 69.4° に矯正され、胸郭の左右対称性を示す Space Available for Lung (SAL) は術前平均 71% から 79% に増加した。呼吸機能も評価可能な範囲では改善が認められた。合併症では感染 2 例、implant の脱転 1 例を認めた。術後はほぼ全例で、呼吸障害が生じ、長期の ICU 管理が必要であったと報告した。

以上、今回のパネルディスカッション「早期発病側弯症の治療」について座長総括を述べた。このような早期発病側弯症例をいかに治療するかということが、今後側弯症を専門とする医師の真価が問われる領域であり、そのためには今回発表があった治療や新しい治療法の試みについてさらなる努力を続けていく必要があると感じた。

(文責：瀬本喜啓)